



今日から着手できる！ 物流現場改善 メソッド

働き方改革とホワイト物流の推進による物流現場改善は、大きなテーマです。そのため現場力の向上やITの導入に力を入れていく必要があります。ただし、ヤミクモに多額の投資を行っても大きな成果は得られません。労働力不足を知恵と工夫で、物流現場の課題を改善し、乗り切っていく方策を講じる必要があるのです。今回は、ホワイト物流を念頭に置きながら改善事例を紹介します。

知恵と工夫による事例

「帰庫ルートの最適化」

課題

納品後の各ドライバーの帰庫ルートが個別に異なっていたため、走行距離のばらつきや不要な走行、遠回りが発生するケースが増加。その結果、燃費効率が悪化し、コストにも影響が及んでいた。

対策

帰庫ルートを最適化するため、ベテランドライバーが中心となり知識と経験に基づいてルートを組み、全ドライバーで共有。マニュアルを整備し、帰庫ルートを明確に指示する体制を構築した。

効果

- ・ムダな走行が大幅に減少。
- ・燃料コストの削減と運行効率の向上を同時に実現。

〈改善前〉

各ドライバーの帰庫ルートがバラバラだったため、いわゆる“ムダ走り”が発生していた。

〈対策・効果〉

バラバラだった帰庫ルートが最適化されたことにより、運行効率、燃費効率が改善された。



各ドライバーの勘に頼った帰庫ルートから、知識と経験に基づいた効率的なルートに最適化。

ITを活用する事例

「燃料サーチャージ算出シート」※の導入

※同シートは国土交通省が導入を推奨するITツールのひとつ

課題

車両ごと、路線ごとの燃料使用量や単価変動への対応が追いつかず、原価管理が煩雑化していた。また、運賃値上げ要求も“理由が不透明”との声があり、燃料費の管理手法と説明責任の強化が求められていた。

対策

「燃料サーチャージ算出シート」(国土交通省・公正取引委員会公表)を導入。運行実態に合わせてカスタマイズし、データ化を実施。

効果

- ・燃料サーチャージの算出根拠が明確になり、荷主企業への説明がスムーズになった。
- ・運行単位ごとの燃費・コスト分析が可能になり、改善ポイントの特定が容易になった。

〈改善前〉

燃料費高騰で運行コストが圧迫される中、原価計算がより重要になっているがフォローできていない。

〈対策・効果〉

燃料費の管理を手書き台帳から「燃料サーチャージ算出シート」に変更しデータ化したことで、事務処理の負担が軽減した。



「燃料サーチャージ算出シート」により、荷主企業への説明資料が容易に作成でき、運賃値上げ交渉もスムーズに。

算出シートについては
こちら

燃料サーチャージ算出シート

検索

鈴木 邦成 (すずき くにのり)

物流エコノミスト、日本大学特任教授、博士(工学) (日本大学)。早稲田大学大学院修士課程修了。日本ロジスティクスシステム学会理事、日本SCM協会専務理事。専門は物流・ロジスティクス工学。主な著書に「物流DXネットワーク」(NTT出版)、「入門 物流(倉庫)作業の標準化」(日刊工業新聞社)。